

メリメの文化論

— 『カルメン』、ヨーロッパ、アイデンティティ

奥田宏子

はじめに

小説『カルメン』の作者プロスペル・メリメ（一八〇三年—一八七〇年）は、一八三〇年に最初のスペイン旅行に出かけ、見聞録『スペイン便り』を雑誌『パリ評論』*Revue de Paris*に数回に分けて発表した。この見聞録の中で彼は、フランス（「ピレネー山脈のこちら」）では「スペインで起こったことについてはじつに暗い」（四四三）と述べている。⁽¹⁾ 六ヶ月かけた最初の旅行でスペインの自然や風土に直接触れたメリメは、それから一〇年後にも同地を再訪、さらに五年後の一八四五年、『カルメン』を完成させた。最初の訪問から十五年、その間スペイン経験は彼の中で醸成され、小説に実ったと考えられる。

こうして生まれた『カルメン』は、濃厚なエキゾチズムを特色とするが、作者が描く、ピレネーの向こうの異国情緒豊かな出来事は、これまで一括して「この作品のスペイン性」と総称されてきた。⁽²⁾ これは、取材地がスペインで作者と読者はフランス人という状況のもとで想定され得る、フランス対スペインという大きな二つ

の文化的対立を主軸にする『カルメン』理解である。確かに、『カルメン』の語り手「私」は、スペイン語に精通した、スペインを調査旅行中のフランス人考古学者で、同じくスペイン語とスペインに精通し、遺跡調査官でもあった作者自身に重なる人物である。⁽³⁾だが実際の作品は、「フランス人が語るスペイン」の一本路線で貫かれるわけではない。フランス人の「私」以外に、もう一人の語り手バスク人を登場させ、ひとたびバスク人が語り始めると、物語は、バスク人であるがゆえにスペインの「内なる外」を意識する彼の視点を取り込んで、語られるからである。

バスク人に物語が委ねられると、当初の語り手であるフランス人は、バトンタッチした語り手の聞き手にまわる。さらに作品の核となる恋物語の女主人公カルメンは、「故郷を持たない」ボヘミア人という設定である。「外」を意識するバスク人が語る対象者をもまた、作者はスペインの「外」なる者としたのだ

この小説が構造としてもつ、入り組んだ「内と外」の一端を今紹介したが、入り組んだこの「内と外」を囲い込むかたちで、またそれらの中に隠れるかのように、当作品にはもう一つ別の視点が据えられている。それは〈ヨーロッパ〉という視点であり、この視点で見ると、先述のフランス対スペインという基本対立は、別の局面を見せ始める。

広域を意識する視点は、二つの文化の対立を超える世界を拓いて見せ、ここではフランス人の語り手にとって「外」であったスペインは「内」と把握される。〈ヨーロッパ〉という包括的な視点は、これまでなぜか『カルメン』研究で（筆者の知る限り）解釈の焦点となつてこなかったようだが、じつに『カルメン』の語り手を根底で支える原理的な視点に思われるのである。作品に内在するこの〈ヨーロッパ〉という視点から見

『カルメン』は、ヨーロッパ文化論としての新しい姿をあらわしてくることになるであろう。

『カルメン』の面白きは、「内と外」を隔てるさまざまな心理的・理念的距離を巧みに調節する作者の手腕に負うところが大きい。⁽⁴⁾「内と外」を隔てる距離の頻繁で微妙な調節がプロットに緊張感を与えているが、それがすなわちこの小説のすぐれた小説技法でもある。フランスにとつての「外」を描きながら、ヨーロッパという「内」をみつめる作者。非ヨーロッパ（ジプシー性）としての女主人公を通して、対極にあるヨーロッパを炙り出し、ヨーロッパのアイデンティティをそこから炙り出していく。

フランスの「外」なるスペインを描きながらメリメは、ヨーロッパという、自己の「内」、そして「内と外の境界」と出会い、その出会いからヨーロッパの、したがって自己のアイデンティティを、模索していたように思われるのである。

メリメとヨーロッパ

『カルメン』が、最初、世に出たのは単行本による出版ではなく、『両世界評論』*Revue des Deux Mondes* という名の雑誌への掲載だった。このとき発表されたのは、じつは現在の章立ての第三章に当たるもので、二年後の一八四七年、ミシエル・レヴィ社から単行本として出されるに際し、もう一章追加された。恋物語ということであれば、明らかに第三章までで完結している。第四章は、それまでの恋物語とは別立てであり、話法もそれまでと変わっている。作者はここで自身の声で語り、恋物語の女主人公が属するボヘミア人の社会的

実態を紹介し、彼らの民族的・文化的また生活上の情報提供をしている。第四章の冒頭は以下のようなものである。

ボヘミヤン、ヒタノス、ジプシー、チゴイネルなどの名で知られ、ヨーロッパ全体に散在している御承知の放浪民族が、今日なお多数に存在する国の一つはスペインである。多くは南部および東部の諸州、すなわちアンダルシア、エストレマドゥラおよびムルシア王国に住んで、というよりは、放浪生活を送っている。カタルーニャにも相当たくさんいる。このカタルーニャの連中はたびたび国境を越えてフランスへやって来る。南仏で市の立つ場所では、いたるところ、この連中を見かける⁽⁵⁾（一一六）。

この冒頭部でメリメは、彼らジプシーは「ヨーロッパ全体に散在する」と、まず指摘している。彼がジプシーの分布をヨーロッパという統一的概念を背景に把握していることがここから分かる。そのヨーロッパの中でスペインは、彼ら（ボヘミア人）が「なお多数に存在する国の一つ」にすぎないとメリメは付け加える。ジプシーの存在はスペイン固有のものでなくヨーロッパ共通の存在である、とメリメはこの点をはつきりさせている。ジプシー・イコール・スペインという考えをメリメが持っていなかったことが明示されていると言えよう。

また彼らジプシーは、「たびたび国境を越えてフランスへやって来る」、フランスで「いたるところ、この連中を見かける」とメリメは言う。このことから分かるのは、メリメの読者であるフランス人にとってジプシーは、「ピレネーの向こう側」にしか見られないスペイン特有の存在ではないことだ。そしてジプシーは、フラ

ンスとスペイン双方が共有する他者であるということだ。この小説のジプシー性をスペイン性と説明する見解は、したがって作者のジプシー観と一致しないことになる。ボヘミア人はスペインにもフランスにも大勢いる：ヨーロッパ全体に散在する…と言うのであるから、ボヘミア人問題はヨーロッパの問題だ、とメリメは考えていたのである。

後に詳細に見るから結果のみを先取りするが、第三章までの恋物語におけるボヘミア女の描きかたは、ジプシーに対する警戒心を抱かざるを得ないものとなっている。カルメンの相手方であるドン・ホセを筆頭に語り手までもが、ボヘミア女カルメンを「悪魔扱い」しているのだ。その意味で第四章は、一種の修正案とも見て取れる。第三章までのジプシーへの否定的姿勢を緩和するべく、第四章が、ある意味、バランスをとる試みとして二年後に付加されたと考えられるのだ。また第四章でジプシー情報を客観的に提供しようとしているのは、当時流行していたエキゾチズムという主観的な嗜好（第三章までの恋物語にはそれを導入している）から、一旦、身を離して、作者がいれば距離を置いて、彼なりに「科学的」（民族学的）に、ボヘミア人の文化や習慣を紹介する必要を感じたからに違いない。

非ヨーロッパ的異文化をもつ他者を劣等とする立場は、十八―十九世紀のヨーロッパ思想において珍しくないものだったが、小説で自ら採用した、非ヨーロッパに対するこの否定的評価に対して、何らかの弁解の必要をメリメが感じていた可能性があるとすれば、この可能性を第四章追加の理由と見ることができ⁶る。メリメの広い経験と博識をもってすれば、異文化を拒否する第三章までの自己の作品に、執筆後、何らかの不安を持つたとしても不思議ではない。エキゾチズムは、「外」なるもの、珍しいもの、異なるもの、へと惹きつける力

をもつものであり、小説ではこの力を借りて一方で物語を推進するのだが、他方では結果的にこの異文化を否定したからである。

エキゾチズムが「内」なるものに戻るべくして「外」へ向かう、二方向の力学に依存する限りにおいて、異質の利用とその否定という矛盾をメリメの小説が孕んでいたとしても不思議ではない。第四章追加の背景に、この二方向への引力を冷静に眺める作者の目を感じるのである。作者自身が、二年後とはいえ、最終版に第四章を追加したのであるから、いずれにしても恋物語に直接に関与しない第四章を、読者は「余分なもの」とすることはできない。この章を含んだ総体を『カルメン』として受容するべきは言うまでもないことだ。

メリメに先立って十八世紀の啓蒙主義に生きたヨーロッパ人は、すでにヨーロッパ大陸が世界の四大陸のなかで、面的には最少ながら、質的に（商業、航海術、工業、農業、科学、芸術などを含む文明度一般において）もっとも先進的と自負していた。メリメを含む彼と同時代のフランス人も、この確信を一般的に間違いない継承したが、植民地主義拡大に伴って、十九世紀には他の大陸（とくにアジア）やその他のそれまで未知だった文化や民族との実際の接触や交流がますます増大し、それに伴って以前にも増して、拠り所となる（ヨーロッパ）のアイデンティティを意識的に求めるようになっていった。

第四章で彼自身が指摘する、ヨーロッパの至るところに分布して放浪する他者である非ヨーロッパ民族の存在は、メリメにとって大きな関心事だったが、この他者に関心を持たず持つだけ、ヨーロッパという自己のアイデンティティをメリメは確認しなければすまなくなる。他者の出現、そしてその他者の認識は、転じて自己規定の必要へと導いていった。逆に自己のアイデンティティ確認への衝動が、今度は他者への関心をさらに高

めもする。メリメが「外」なる存在としてのジブシーの習性についての研究に深く入っていった背景に、このような意識の循環があったとみてよいだろう。

第四章で披歴されるボヘミア人の習慣や歴史は、博学で勉強家のメリメならではのものだ。ヨーロッパ中心思想が蔓延する中で、「周辺」であるマイノリティの文化情報をこれだけ収集したのは、この他者に対する例外的な関心を示すものだ。自己の作品の女主人公カルメンを、異質であれば異質として、徹底的にその異質性を描ききろうとする強い動機がメリメにあり、それは作家自身の「内」であるところの強いヨーロッパ意識の裏返しであっただろう。

第三章までの恋物語を掲載した『両世界評論』（一八二九年創刊）は、政治・経済・芸術一般を扱うフランスを代表する評論雑誌である。創刊翌年の一八三〇年、この雑誌は『旅の雑誌』*Journales des Voyages*と合併し、フランス内外の旅行記などを多数掲載しパリの知的階級を主たる読者とした。この雑誌が掲げる「両世界（二つの世界）」とは、自国フランスと広く非フランス一般の二つを意味したが、より大きい単位としてヨーロッパと非ヨーロッパの二つを意味する可能性も排除することはできない。メリメのヨーロッパ意識模索の場である『カルメン』発表の最初の間として、この雑誌はうってつけだったと言えよう。

雑誌のタイトルの「両世界」が暗示した「内（フランス）」と「外（非フランス）」、「内（ヨーロッパ）」と「外（非ヨーロッパ）」という二項対立は、当時拡大していた植民地政策によって、それまで未知だった広大な「外の世界」との、旅行や赴任を含む接触や「発見」の結果として、ヨーロッパ人が強くその境界を意識し始めていたことを表すものである。この状況の中から、いわゆる外国（未知、珍事）好みとしてのエキゾチズム

の流行が始まる。「外の（自分のものでない）」事物の魅力、それらへの好奇心など、メリメは時代の嗜好を取り込みながら、『カルメン』をこの波に乗せて着想し書き上げたと考えられる。

カルメンとヨーロッパ

それでは「異文化のひとつ」カルメンは、小説のなかでどのように描かれているのか。出発点にふさわしいのは、ドン・ホセとカルメンの最初の出会いを描く場面だ。セヴィーリヤに配属され、そこでカルメンと出会い、恋に落ち、最後は彼女を殺し、今は死刑を待つ身のドン・ホセだが、彼女との最初の出会いを、彼は次のように回想する。

一目見ていやな女だと思いました。私はやりかけた仕事にまたかかりました。が、女は、——女と猫は人が呼ぶ時には来ないで、呼ばない時に来るものですが、その例にもれず、私の前に来てたちどまり、言葉をかけたのです（四九）。

カルメンは、最初から「まったくボヘミア女の名に恥じぬ凶々しさ」（四九）をもっていた、とドン・ホセは言っている。「私の故郷なら、こんな風体の女を見れば、みんな肝をつぶして十字を切るところです」（四九）と続く。バスク人で「先祖代々のキリスト教徒」（四六）がドン・ホセの自負である。彼のカルメン評価

(郷里の人なら「肝をつぶして十字を切る」)には、キリスト教的な価値観を基準にした抵抗がまず現れている。続く場面で、彼の眉間にカルメンが一輪のアカシアを投げつける。その花を拾いあげ、恋が始まったが、「魔がさしたとでもいうのでしょうか、これが最初の失敗でした」と述懐している。

「魔がさした」の「魔」は、第三章までのカルメン描写のキーワードである。語り手の考古学者とカルメンとの最初の出会いを見てみよう。コルドヴァを流れるグアダルクビル川の河岸で「美しい魔法使いの女」すなわちポヘミア人のカルメンに出会った。語り手はここでポヘミア人と魔法使いを最初からセットにしている。家に語り手を案内したカルメンは、「魔法の儀式」を始めた。手際よさからして「かけ出しの魔法使いでない」と考古学者は判断する。左手で切る十字、占いやまじない、魔法などなど。フランスから来た生真面目な学者はカルメンに邪教的な魔術師のイメージを重ねる。

ヨーロッパ史の悪夢だった魔女(異端者)狩りのイメージがカルメンに重ねられている。キリスト教の歴史で、初期教父の時代から、異教や異端は長らく「悪魔」と呼んで大いなる警戒の相手、最大の敵だった。悪魔はキリストに敵対するすべての存在の表象、つまり「反キリスト」である。この伝統に照らして、「悪魔」カルメンはキリストの対極にいる。中世以来、ヨーロッパ人はヨーロッパ的アイデンティティ確立に際して、伝統的にまず宗教的アイデンティティとしてのキリスト教を統一原理とした。そのころからヨーロッパとは、キリスト教支配圏のことを指し、非ヨーロッパとヨーロッパの対立は、キリスト教対非キリスト教の対立となる。この対立構図がカルメン描写にそのまま反映されているのだ。

「悪魔的」に加えて、カルメンはまた、「凶暴性」という特徴で描写される。語り手は「彼女の目は情欲的で

あり、同時に兇暴な表情を備えており、以後私は人間の目つきにこういう表情をみいだしたことはない」（三七）と言う。「ボヘミア人の目、狼の目、というのはスペイン人のことわざであるが、なかなか鋭い観察を示しているといえよう」（三七）と続くのだが、カルメンはここでは、非人間的で狼（動物）のようだとされている。スペイン人がボヘミア人を狼に例えた諺を引用し、語り手はスペイン人に賛成する。フランス人の語り手はスペイン人と同じ視点から、「非人間的」なカルメンに、「動物性」と「凶暴性」を見るのだ。

ここで語り手が「スペイン人」と同じ視線で「ボヘミア人」カルメンを見ていることは重要である。その前に前提として、「スペイン人」とカルメンをくつきり峻別する姿勢を打ち出している点は、さらに重要である。ここでの「スペイン人」という言及は、「スペイン」がカルメンを含まないことの表明である。フランス人の語り手は、「スペイン人」に主導させて彼らの「ボヘミア人」観に同調するかたちで、カルメンの情欲的特性や凶暴性に警戒心を発動する。狼のような「目」、人間の「目つき」にこういう表情をみたことはない……と言う。

となるとカルメンは、宗教面またそれに付随する倫理面で、非ヨーロッパと断じられているばかりでなく、目つきや表情を含む「外観」からも、非スペインであり非ヨーロッパである。第四章でメリメは、この点に関連して、「ボヘミア人の肉体的特徴はここに記述するよりも、実地に識別するほうがはるかに容易である」（一七）と述べ、また「一度見ておけば、千人の人に混じっていても、この種族に属する人間を見かけることは困難ではない」（一一七）と述べている。顔かたちと表情、皮膚の色（土地の人間よりはるかに黒い）などの外観的特徴、目やまつげ（「まっ黒で濃く長い」）の特徴も挙げて、「野獣の目つき以外に彼らの視線をくら

べることはできない」(一一七)と結論している。

狼の目の比喩などから、カルメンは人間であるよりも動物に近いというわけだが、キリスト教の伝統では人間と動物の間には一線が引かれている(人間は神のイメージで造られた)。これを受けて、また文脈から判断しても、カルメンの「非人間性」は、すなわち彼女の劣性に他ならない。ヨーロッパはアイデンティティとして文化・文明の先進性を自負し、対する非ヨーロッパに未開・野蛮のラベルを貼っていた(もしくは貼っている)。この図式は、ヨーロッパと非ヨーロッパを単なる二項対立でなく、先進と後進の關係に置くものであり、カルメンは明らかに劣等に位置づけられる。時代のヨーロッパ優越観、キリスト教的人間観を、個人としての信仰心はともあれメリメも彼の小説で、イデオロギーとして受け継いでいるのだ。

色欲・情欲は、禁欲的要素の強いキリスト教のもとでは決して歓迎されてこなかった。「情欲的な目」をしているというカルメンは、この点でも困惑の対象のはずだ。そこへ加わるのが彼女の「凶暴性」である。語り手および「スペイン人」がヨーロッパ的共通価値に立つて、この外部者に対し抵抗感をもつのみならず「凶暴性」を感知しているとは、カルメンを危険人物視していることでもある。侵害の危険までではないにしろ、ヨーロッパが非ヨーロッパなる異質を怖れていたことを伝えるに十分であろう。

言いかえれば、カルメンが代表するこの異質は、ヨーロッパ社会に何らかの意味で挑戦となっているのである。第四章の冒頭でメリメは、このヨーロッパ内の異分子が「いたるところに見られる」と述べた。「いたるところに」とは、もはや見逃せる程度の少数ではない、相当数いて、それなりに圧倒しかねない状態なのであろう。だが小説の描写では、単に「いたるところに見られる」(受動的)に留まらず、むしろいたるところで

ヨーロッパに対して挑戦的な存在（「凶暴」）であるとしている。あきらかに一歩進んだ状況である。十九世紀半ばのメリメにとつて、ヨーロッパおよびヨーロッパ的価値がもはや以前のように安泰でなかった、「外」からの侵食を怖れていたことが感じられる。

メリメが描くボヘミア女カルメンが、警戒を要する異文化であることをここまで跡づけてきたが、これまでの観察から言えるのは、語り手およびスペイン人は、カルメンに否定的評価を下し、反スペイン・反ヨーロッパとして彼女を拒絶しているということだ。第四章でメリメが取えて確認するように、カルメンはフランスにとつての「外」、ドイツにとつての「外」、そしてスペインにとつても「外」、すなわちヨーロッパにとつての「外」なのであった。

他方、カルメンの相手方として配されるドン・ホセは、軍務（スペインの社会規範・社会秩序の守備を担当）に忠実でありたいと努めるバスク人だ。最後は（カルメン殺しの罪のために）スペインの法によって死刑囚となり、ドミニコ神父の手に委ねられるが、それまでの半生において彼もまた、バスク人としての自己規定から、「スペイン人」を他者と意識してきた。「私もバスクの者は、一種とくべつな言葉の調子を持っておりますので、容易にスペイン人と区別できません」（五四）という発言、そしてまたバスク語 *Dai Jaona*（「はい、そうです」の意）というただひとつをおぼえることができるものは、「スペイン人の中には一人もありません」（五四）という発言が目を引く。

カルメンたちボヘミア人は、ドン・ホセに言わせれば、「どこといって故郷があるわけではなく、一年中旅をして」（五四）いる。ボヘミア人はいろんな言葉に通じ、カルメン自身バスク語も話した。そこで、非スベ

ン語を喋り、非スペイン性を共有する二人の間に、共感が芽生えた。仲間の女工に侮辱された件についてカルメンが、「私がこんなかたり者やくさったオレンジを売る奴らの国の者でないというので、みんなで私に恥をかかせたのよ」(五五)とスペインへの恨み言を述べると、スペイン人に恥をかかされた、という一言でドン・ホセは次のように反応する。「もしもスペイン人どもが、自分の故郷の悪口をならべるようなまねでもすれば、自分だって奴らの面に一撃を食わせたかもしれない、女が先刻仲間の女工をやっつけたと同じように」(五六)。二人のアウトサイダーはそれぞれ、差別に憤懣やるかたない思いをもっている。

だが、カルメンは「故郷をもたない」完全なるアウトサイダーであるとしても、ドン・ホセにはスペイン内に故郷がある。ドン・ホセのスペインへの忠誠心は、したがって、完全なるアウトサイダーであるカルメンには理解しがたく、またこれが彼女には我慢ならない。彼女が彼を小心者呼ばわりし、体制におもねて生きる男と批判するのはそのためだ。ここに二人の根本的な違いと葛藤がある。完全なる「外」であるカルメンは、スペイン社会から逸脱したまま、密輸という裏社会に活路を得て生きている。正規の社会に背を向けて、スペイン「内」で敢然と「外」として生き抜く。そしてまもなくドン・ホセをその裏社会に引き込んでいくのだが：

(カルメンはドン・ホセに言う)「お前さんは気のきいた泥棒のまねをするには間が抜けすぎていてくれども、からだははしっこくて力があるし：浜へ行くがいいやね。そうして密輸入者におなりよ。ほら、お前さんを絞首台につるしてやるって約束したじゃないか？」(七六)。

恋に落ちたドン・ホセはカルメンの誘いに乗り、スペインの表社会（軍務）からずり落ち、こうして裏社会（密輸）に関わっていく。

ドン・ホセとヨーロッパ

ドン・ホセは故郷の谷間の町エリソンドを出て、セヴィーリヤの煙草工場の衛兵に配属され、その工場で働くカルメンに出会った。「これが一生の不運のものでした」（四七）とドン・ホセは語り手の考古学者に苦々しく回顧する。カルメンとの半生を「魔がさした」とし、キリスト教式の改悛に至ったドン・ホセ。この男がスペインの「外」（異分子）としてのカルメンを、最終的に、抹消することになるとは……。

ドン・ホセがカルメンを殺したことは、結果として、スペインにおける異質・逸脱者を、彼が抹消したということだ。二人の未来に残された唯一の道をドン・ホセがアメリカと考えたのは、彼らを排除しているのが特定のスペインであるよりも、より大きな共同体としての（ヨーロッパ）と考えたからだ。ジプシーであるカルメンはヨーロッパからの排除者だとする考えがドン・ホセにもあったことを、彼のアメリカ移住案が告げている。ジプシーがスペインの問題にとどまらず、全ヨーロッパの問題だとメリメが認識していたことは、すでに見たとおりだ。アメリカへの逃避を最後に提案することにより、解決がヨーロッパ内に求められないことが示されたと見てよいであろう。新大陸アメリカは、夢（未来）の地であり、かつまた追放・流刑・清算の地でもあった。

そのアメリカへの脱出をドン・ホセはカルメンにつきのように提案した。「なあ、きいてくれ、おれは何もかも水に流すつもりだ。もう何も言わない。たった一つこれだけのことを誓ってくれ。おれと一緒にアメリカへ渡って、地道に暮らすことを誓ってくれ」(一〇〇)。ドン・ホセはそれまでの生活を解消して、新生活への夢を追求しなかった。それは消極的には逃亡、積極的には問題解決と新生活の開拓だった。

故郷を出て軍に入り、そこでの出世に生涯をかけようとしていたドン・ホセ。スペインへの同化を当初は望んでいた。すでに見てきた後悔は、本来のこの願いに反してしまった己の半生への後悔である。カルメンの脱走を助けたために、上官から位を下げられ営倉に送られたとき、「罰一つ受けずに勤めあげて来たこれまでの月日を、棒に振った」(五九)と彼は感じた。スペインの「お役に立ち士官になる」、という人生計画は狂った。何ゆえに自分はなり下がったのか。同郷の男たちは皆「ちゃんと将校になっている」(五八)ではないか。大佐になった男もいる。それもこれも「きさまをばかにしたあのいまましいボヘミア女のためではないか！」(五九)と地団太を踏むのだ。

作者がこれほどドン・ホセを後悔させるのはなぜか。一つには心からの改悛を明示して、伝統的な宗教(キリスト教)的救済を彼に用意するためである。もう一つ見逃せないのは、読者の同情をドン・ホセに集めるためである。カルメンが彼によって最終的に殺され断罪されるという決着に、何らかの読者の共感を得るには、前提として、下手人であるドン・ホセへの同情を用意しておかなければならない。カルメンとの半生に後悔し、苦悩し、悲しむドン・ホセ像は、こうした同情喚起に必要となる⁽⁷⁾。その際、語り手が先導役を果たして、終始、ドン・ホセに理解と同情を示す役割を受け持っている。総合的な狙いは、ドン・ホセのイメージアップである。

ドン・ホセへの同情は、この小説の結論を正当化し、諸問題に収支をつけるための情緒的な準備となる。メリメは読者の同情を、アウトサイダーとして奮闘するカルメンには向けず、彼女の誘惑に心ならずも屈してしまつたドン・ホセに向けたのである。ドン・ホセへの語り手の同情は、ある時点で文学的な連想を伴つて表現される。すなわちドン・ホセに「ミルトンのサタン」的要素を重ねる場面である。「おそらくミルトンのサタンと同じく、私の道連れ（ドン・ホセ）もまた、見捨てて来た故郷や、一度犯した過ちが招いた追放の境涯に思いを馳せているのであろう」（二二）と語り手は好意的な想像を巡らすのだ。

十八世紀のイギリス詩人ジョン・ミルトンは、聖書の樂園喪失を描く叙事詩において、「悪魔」であるサタンの描写において、英雄視に近いポジティブな面を見せたということ、ヨーロッパのロマン派詩人にその新奇さを注目されたのだが、『カルメン』の語り手がドン・ホセを、その「ミルトンのサタン」に引き寄せようとしたのは、「ミルトンのサタン」と同種の悲壮かつ英雄的な魅力をドン・ホセに重ねようとしたからである。囚人の身ではあつてもドン・ホセに、いわば英雄叙事詩的・文学的なヒーローの「格」を与えようとしたのであり、メリメのドン・ホセへの共感、さらに言えば好意があつてこそそのアナロジーである。

最終場面で、ドン・ホセのアメリカ移住案をカルメンは拒否する。「いけないよ。私はアメリカなんか行きたくないよ。ここでたくさんさ。——ふて腐つた調子で、女はこう言いました（二〇四）。アメリカかヨーロッパか、の最終選択に行き着いたドン・ホセとは自己のアイデンティティへの決着をつけなければならないドン・ホセである。ヨーロッパから脱出するのか、ヨーロッパとの関係を再構築・修復するのか。ドン・ホセにとって、それはすなわちスペインとの関係における自己のアイデンティティに答を出すことであつた。

そしてカルメンがアメリカへの道を断った時、ドン・ホセもまたアメリカという夢を断って、ヨーロッパ（スペイン）に本格的に帰属する決意を固める。この時点で彼はカルメンを殺すが、それはヨーロッパ的アイデンティティを獲得した新しい自分が、非ヨーロッパを殺したことを意味する。異質を克服した男が、もう一つの異質を抹消したのだ、アウトサイダー（内なる外）同士の間で、アウトサイダー（内なる外）同士の相互制裁への道を辿った。こうして見るとメリメは、結果として、スペインとスペイン人には異分子の排除をさせていない。

「はじめに」でも指摘したが、メリメのフランス人読者においてはフランス対スペインという対立は暗黙のうち存在している。無意識的でもあるこの対立を、作者が積極的なスペイン批判によって敢えて深める方向に行くだろうかという問いを立てることはできない。仮にスペイン人にカルメン（非スペイン）を殺させると、ことは簡単かもしれないが、それはスペインによるあからさまなマイノリティ抹殺であるし、これでは単なる弱者撃退の物語になり下がりがかねない。フランス人がもっているそもそもの対立意識を、これでは強化するだけだ。メリメはこのあたりのことも十分に考慮して、プロットを練ったであろう。表だった隣国批判は、よほどの目的がない限り、小説には重すぎる。風刺小説を目指すなら話は別であるが、そうでなければメリメとしては、この辺の匙加減をする必要があっただろう。

ドン・ホセのカルメン殺しというアウトサイダー同士の制裁について、もう一つ別の見方もできる。メリメが、逆に、この小説で異文化接触の大先輩スペインを立てる基本姿勢をそもそも持っていたとする見方であり、この可能性も一概に否定はできない。次の章でやや異なる角度からもう一度、この可能性を探ってみよう。

だ。いずれにしても、灼熱の、陽気な南欧を舞台に、情熱的なカルメンのカスタネットが響き渡る恋物語には、異分子の消滅（抹殺）という厳しい結末が用意されていた。

ドン・ホセは死刑執行される予定であるから、逸脱者の制裁と言っても、それは究極のところ相互破滅の私たちをとる。終始「悪魔」呼ばわりされてきたカルメンであれば、ヨーロッパ文化圏の一般読者の心に彼女の死は悪魔制覇（悪魔払い）であり、また同時に自滅的な死とも映るだろう。だが振り返って考えてみると、「スペイン人女工殺し」という幕開けの罪をカルメンはまだ償っていないのではなかったか。この殺傷事件を起こして監獄に護送される道中で、彼女はドン・ホセに助けられて逃走したのではなかったか。これこそが二人の最初の罪、それも共謀罪だったのだから。

ボヘミアの名誉を守るためにスペイン人女工を殺したカルメン。振り上げた刀がまわりまわって自分の上に落ちたかのように殺された。自己のアイデンティティを再確認したドン・ホセの短刀が、悪魔払いの武器となり、彼はスペイン警察に代わる国法守備の役割を担い、スペイン人女工の死にスペインに代わって報復したかのようである。だがカルメンは罰されなければならなかったのだ。彼女の死に不条理がないよう、メリメは手立てを怠っていない。

森にカルメンを埋め、最寄の屯営所に自首するところで、ドン・ホセの回顧談は終わる。「考えてみれば、かわいそうな女です。あんな風な女にそだて上げられたのも、みんなカレたちが悪いのです」（一一一）という言葉を残して。この最終台詞に、この小説のボヘミア人断罪もまたまとめられているように思われる。みんなカレ（ボヘミア人）たちが悪い……つまりボヘミア人にすべての罪の源があるという。アイデンティティに加

えて、読者の好意と同情をも獲得したドン・ホセの口を借りて述べたボヘミア人糾弾をもって、メリメは第三章を閉じた。

ヨーロッパ、スペイン、アイデンティティ

『カルメン』が書かれた十九世紀半ばは、ヨーロッパの植民地政策拡大期であり、それまで以上に異文化・異民族意識が高まる状況にあった。非ヨーロッパという外部（とくに植民地支配の対象としてのアジア）との接触は、ヨーロッパに自己のアイデンティティを問い直させ、またそれを固めさせる契機となった。「外」の認識は「内」の認識に向かわせ、ヨーロッパと非ヨーロッパの境界意識を強化し、自らのヨーロッパ的文化伝統の守備意識をも高めた。

メリメが第四章で「ボヘミア人の言葉を研究した東方学者の大部分は、ボヘミア人はインド出生であると信じている」（二二四）と述べているように、カルメンたちボヘミア人（長らくヨーロッパではエジプト出身説が流通していたのだが）は、メリメの時代にすでにアジア系と結論づけられるに至っていた。当時アジアはヨーロッパの大国にとって植民地支配の対象であり、メリメのフランスも、この政治的視点からアジアを見ていたという点では例外ではない。そんな中で文化面では、植民地アジアの一地域に特定の現地取材した絵画や文学すなわち一般的にオリエンタリズムと呼ばれる芸術の流行が始まることになる。メリメの場合、アジアでの現地取材に基づく作品を書くのでなく、ヨーロッパ内のアジアであるボヘミア人を取り上げて作品の主題と

した。

他者は異質であるがゆえに、差異への認識から、己の限界や欠落を補充・補完する可能性を開いて見せることができるとが、メリメの他者（ボヘミア人）認識にそういう発想は見出せなかった。ただし彼は、自分の、警戒心に満ちた否定的なボヘミア人観を、距離を置いた視点から再評価したいという意思を少なくとももっている。第四章の追加は彼のそうした意志の反映と考えられることを本論では指摘した。少なくともそこでは、ボヘミア人に関して当時彼が収集出来た限りにおいて、多くの情報を提供する努力が払われた。情報不足ゆえの先入観や偏見をいくらか回避したいという思いをそこに読み取ることができる。

何よりもまた、メリメ自らが「アジア出身」と定義したボヘミア人（カルメン）を、すすんで自己の作品の女主人公に選んだ事実から、彼が非ヨーロッパという異文化に並々ならぬ関心をもってたことを察することができる。ボヘミア人を主人公にするには、作家としてはボヘミア人とことん知ろうとしなければならなかったであろうから、生半可で気まぐれな興味本位以上のものが彼にあつたことは疑えない。異文化に対する彼の大きな関心は、エキゾチズムと称されるいわゆる当時流行り始めていた「異国趣味」と無関係ではなく、むしろこのエキゾチズムの路線に乗ってメリメは大衆受けするアトラクション的感覚で、意識的に「異国的な」カルメンを創造し展開した。

メリメはヨーロッパの伝統にない「新奇・不可解な」エネルギー（小説では一人の女の情念に具体化）を異国情緒たつぷりに描いたが、そのエネルギーは、終始、異分子として否定され、ついにそれは制覇・排除された。話はヨーロッパ的アイデンティティ守備で結ばれた。恋物語のみを見る限り、抹消された非ヨーロッパへ

の同情は感じられず、他者を代表するカルメンの排除（死）に悲哀感をメリメは付与していない。カルメンの莫大なエネルギーは、夜空の花火のように、自爆に近い形で消滅した。

だが第四章も含めて、文化論として読む『カルメン』は、別の含みをもって終わっている。ヨーロッパ人は歴史的に、古代ギリシャと古代ローマという人類史上「偉大な」（と彼らが考えた）文明の「正統な」（と彼らが考えた）継承者であることを自認しており、中世以降、キリスト教を媒体とする宗教的・文化的結束を保ち得た限りにおいて、またこれらを拠り所とすることができた限りにおいて、「我々は何者か」という厳密なアイデンティティの必要に悩まされることはなかった。ヨーロッパ人としてのアイデンティティは、対イスラームという状況で間違いなく問われたが、それはイスラームとの接触が直接なかった地域にとっては、必ずしも緊迫したものとはならなかった。この点、スペインこそがヨーロッパでイスラームとの接触において前線に立った国である。キリスト教保守をついに再征服を通して成し遂げた国である。

『ブレネーの向こう側』でスペインは、ヨーロッパのフロンティアとしてアラブ世界との攻防を戦い、レコンキスタによってキリスト教世界（ヨーロッパのアイデンティティ）を回復した。冒頭で引用した『スペイン便り』の一節、『ブレネー山脈のこちら側』では「スペインのことについてじつに暗い」というメリメの発言の真意は、ヨーロッパへのスペインのこうした歴史的貢献に鑑みて、当然にもっと知ってしかるべきスペインを意外と「知らない」ことを指摘することだったと解釈しなおすことも不可能ではないであろう。

『カルメン』の書き出し部分で、語り手はスペイン旅行の目的を具体的に述べている。フランスからスペインに来たのは「ムンダの古戦場」というシーザーゆかりの「記念すべき地」（一一）の確認のためだと言う。

それは「未解決のまま残された諸問題を解く」ための(一一)調査旅行で、この調査の結果によって「全ヨーロッパの学界に未解決のまま残された地理上の問題を解決し去るまで：一席ささやかな物語を、御話いたそうと思う」(一二)という前書が置かれている。古代ローマの「記念すべき」古戦場の位置確認のためにスペインに來たと敢えて表明するこの冒頭部から、小説『カルメン』と古代ローマ(帝國的覇権の祖型)との結びつきがメリメにあったことを確認できる。

「未解決のまま残された諸問題」と繰り返しているからには、頼るべきこの祖型における決戦の地に関して、確証がそれまで得られていなかったことになる。この問題が解決すれば「全ヨーロッパ」に朗報をもたらすであろうと言うが、さて「全ヨーロッパ」に朗報をもたらす問題解決はあったのだろうか。この点について、語り手は、近く「公にする小論」でその答を出そうと「ひそかに期する」と述べているから、何らかの成就があったことは示唆されている。

しかし成就があったにしては、発表を延期して、「ひそかに期する」のみとは、消極的に過ぎるといふ印象を免れ得ない。調査中の問題は小説と直接に関係はない(「もつとも、この物語は(調査中のムンダの位置決定に対して)：…なんらの憶断をくだすものではない」(一二)とわざわざ付言するあたりにも、この件に関する拘りが感じられる。ともあれここでは、古代ローマというヨーロッパ人の歴史的アイデンティティに関わる大きな枠組を「枕」にして、メリメが『カルメン』を語ろうとした事実の重要性を指摘したい。

ムンダの戦い(紀元前四六年)は、古代ローマによるイベリア半島平定にとって決定的な意味をもち、激戦の末にシーザーが勝利を勝ち取った記念すべき戦いである。『カルメン』執筆の契機とこの決戦を関連づけた

のは、メリメにおいて「ヒスパニア」と「ヨーロッパ」とが小説の背景で重ねあわされて構想されていたからに他ならない。そうであるなら、問題解決を意味する「朗報」を中で公表せず、なぜ作者は別の小論に公表を譲るのか。

従来の共同体意識や歴史的自負だけではヨーロッパがアイデンティティを確保しきれなくなっていた変動の時代にあつて、マイノリティの制裁（非ヨーロッパの抹消）というかたちで「目的を成就」したことにメリメがもった躊躇が、図らずも（あるいは意図的に）、この歯切れの悪さのかたちをとつたのであろうか。支配原理から脱却できないまま閉じた恋物語への、これは作者のささやかなアポロジーだったのだろうか。メリメは答を読者に託して筆を置いている。

注

- (1) テクストは *Lettres adressées d'Espagne au directeur de la Revue de Paris, Romans et Nouvelles, Tome I, Édition de M.Parturier, Garnier Frères, 1967*、邦訳にプロスベル・メリメ、江口清訳『スペイン便り』（『メリメ全集 第一巻』河出書房新社 一九七七年）があり、括弧内の引用頁は同書による。メリメのこの発言の意味については最終章で再考する。
- (2) 「スペイン性」に関する最近の研究に、田口紀子「フィクションとしての旅行記—メリメの『カルメン』に見る「スペイン性」の表象」紀平英作編『グローバル化時代の人文学』（京都大学学術出版会 二〇〇七年）三九—四一九頁がある。
- (3) メリメは作家以外に、旅行家、遺跡監督官、海外通信員、上院議員など多数の肩書をもっていた。『カルメン』の語り手「私」は、批評上では作者自身と同視されるのが通例で、敢えて「私」と作者の峻別に拘らない研究がほとんどである。本稿でも両者の峻別を議論上必要としないが、作中の「私」を「語り手」と呼び、「語り手」を含むすべての登場人物と物語のすべてに目配りする作家を「作者」と呼んで、ひとまず区

別した。

(4) 『カルメン』の説話構造を「言説生成の機構」として言語学的な面を重視しながら分析した著作に末松壽『メリメの『カルメン』』はどのように作られているか（九州大学出版会、二〇〇三年）がある。

(5) テクストは Prosper Mérimé, *Carmen. Romans et Nouvelles*, Éditions Gallimard, 1951 を使用した。なお本文中の引用はすべて杉捷夫訳『カルメン』（岩波書店、一九二九年）を使わせてもらい本文中の括弧内に頁数を付した。より新しい邦訳に工藤庸子訳『カルメン』（新書館、一九九七年）がある。

(6) 出版当時の第四章の不評について、右掲の末松（二八―三八頁）参照。

(7) 語り手とドン・ホセの出会いの際、ホセの外観描写（「消えかかった炬の火をじっと見つめ（る）」暗い顔には「ふしぎな悲しみの表情がうかんでいた……どこか気品があつてしかもすこみのあるこの男の顔」二二頁）にも、ロマン化・英雄化の傾向が認められる。